

令和3年度

第1回総合教育会議会議録

(開会 令和3年7月26日)

(閉会 令和3年7月26日)

岐阜県可児市教育委員会

令和3年7月26日午後2時00分開会

出席者

富田成輝君（市長）

伊藤小百合君（教育委員）

小栗照代君（教育委員）

石原雅行君（教育総務課長）

千葉智治君（教育研究所主任指導主事）

堀部好彦君（教育長）

丹羽千明君（教育委員）

長井知子君（教育委員）

今井竜生君（学校教育課長）

教育委員会事務局職員

木村彰伯君（教育総務課総務係長）

小池拓哉君（教育総務課総務係）

中水麻以君（教育総務課総務係）

開会宣言

- 市長（富田成輝君） 令和3年度第1回目の総合教育会議の開会を宣言。

あいさつ

- 市長（富田成輝君） 本日は議題が3つ、コロナによる子どもたちへの影響など、教育委員の方々が耳にしたことなども含め、色々と議論させていただきたい。

議題1 児童数減少に伴う兼山小学校の今後について

- 市長（富田成輝君） 今後、兼山小学校の児童数が減少して複式学級になり、令和9年度には新1年生が1人だけとなる予想である。保護者アンケートの結果について事務局から説明を。
- 教育総務課長（石原雅行君） 「今後の兼山小学校を考える」アンケート調査報告書について。本アンケートは、保護者の率直な意見、考えを聞き、今後検討する際の参考とするために実施したものである。

対象者は、兼山小学校在校生の保護者と今後同校に就学見込みの児童の保護者の59世帯。4月28日に配付し、5月20日までを回答期限として実施した。

33世帯から回答があり、回収率は55.9%であった。このうち在籍児童がいる世帯は66.7%、未就学の子だけの世帯は29.4%と低かった。

質問は、シンプルに2問。1問目は「あなたのお子さんは未就学か」「1から3年生か」「4から6年生か」といった状況をお聞きするもの。

2問目は、「今後、兼山小学校の児童数が減少し、複式学級となることや学校統合を検討することなどが考えられるが、お子さんにとってどの方法がよいと考えるか」、「①複式学級となっても兼山小学校で学ぶ（学校統合をしない）」「②学校統合を検討する」というものである。

結果は、「①兼山小で学ぶ」が25世帯で全体の75.8%、「②統合を検討する」は7世帯で21.2%であった。

このアンケート結果を受け、6月21日実施の教育政策会議にて今後の対応を検討し、7月7日に複式学級であり小規模特認校制度を設けている美濃加茂市立三和小学校を教育長、教育委員、局長が視察した。この視察後、7月13日に教育政策会議を実施し、再度今後の対応策について検討を行った。

では、検討結果の今後の対応策案についてご確認いただきたい。

「1 アンケート結果の今後の方向性」アンケート結果を受け、昨年度改定した学校規模適正化に関する基本方針に基づき検討をしていくということ。

「2 学校規模適正化に関する基本方針」のポイントとして、今後の進め方は児童や保護者の意向を優先して考え、学校関係者と協力しながら、子供たちのよりよい教育環境という視点で統合も視野に入れた検討を進めていくこと。学級数については、ある程度の学校規模が必要であり、少なくとも1学年1学級以上が必要で、クラス替えが可能な1学年2学級以上であることが望ましいとしているということである。

「参考 兼山小学校児童数推移予測」にあるように、6月7日時点では令和7年度に

2年生と3年生が複式学級になる予定である。令和9年度には、新1年生は1人となる。これは、3月14日に実施した保護者説明会では明らかとなっていなかったため、保護者は知らない状況である。このままいくと、令和10年度には1年生から6年生が全て複式学級になってしまうのではという見込みもある。

そこで「3 今後の対応策（案）」、1つ目、児童数はこのように減少していくことを踏まえ、子供たちのよりよい教育環境という視点で統合も視野に入れた検討をしていく必要があるが、75.8%の保護者が「複式学級となっても兼山小学校で学びたい」と考えていることから、現時点では現状を維持する方向で検討していく。

2つ目、1学年1学級以上が望ましく、複式学級にならないようにするため、児童数が増える可能性のある小規模特認校制度の活用を検討する。

3つ目、引き続き保護者同士で議論し続けてもらうよう働きかけていく。また、回答率の低かった未就学の保護者へ実情などを説明していく。

4つ目、複式学級になった時点で、再度説明会やアンケートの実施を検討する。保護者の意向など、状況によっては前倒しで実施することも必要であると考えます。

以上、今現在の教育委員会としての対応策の案である。

- **市長（富田成輝君）** それぞれの御意見をお聞きしたい。
- **教育委員（伊藤小百合君）** 美濃加茂市立三和小学校にて複式学級を先日視察した。1・2年生、3・4年生、5・6年生という形で、全学年が複式学級であり、県費や市費の先生がおり、複式ではあるが国語、算数、英語に限っては1学年1人の先生がついていた。自分が当初思っていた複式学級とは異なり、充実している面があったと感じた。

ただ、必ずしも県費や市費の先生が毎年割り当てられるわけではないため、子供の学習保障という点では、先生がいない学年の子供たちは自習や復習などをするという点を考えると、複式学級はどうなのかと考えさせられている。
- **教育委員（丹羽千明君）** 三和小学校は22名と少ない人数であったが、先生がすごく情熱を持って授業されており、地域に愛されている学校だと感じた。4年生に限っては児童がゼロのため、実際3年生は複式ではなかったが、人数は本当に少なかった。

その中で、小規模特認校制度を活用し、約5名が地区外から通学しており、やはり少ない人数より、少しでも多いほうが子供にとってはよい影響になっているということであった。

兼山小学校への教育委員訪問の際、今は50名の児童がいるが、やはり少しずつ減ってきたということで、金管バンドに関しては維持が困難な人数になってきていると。現在は複式ではなく教育としてはうまくやれており、兼山の人に愛されていると実感したため、やはり兼山に必要な学校だと感じた。
- **教育委員（小栗照代君）** 三和小学校は、現状は複式と言いながらも、先生が1人ずつ各学年についているという状況であった。デメリットを伺ったところ、手をかけ過ぎてしまうと。確かに見学した際、先生と生徒が1対1の学年もあり、本当に目が届き過ぎてしまっていると。その状況は、本当に子供にとっていいのかと大変疑問であった。

また、先ほどのアンケート結果についてだが、私たちは数字としてしかアンケートを

見ることができないため、兼山小学校の校長先生に、実際に保護者はどう思っていると思われるかお聞きした。まだ複式学級になることを自分事として考えられていないかもしれない。だから、アンケート結果もできれば複式にというか、兼山小学校でそのままやりたいというような意見が多くなったのではないかということであった。

実際、今複式ではないため、うちの子はまだ大丈夫とか、現状のままいってくれればいいのではというお考えの保護者が多いのではという認識のため、もうせっぱ詰まっている状況だということを知り、今後どうするかについて自分事として考えていただけるようこちらを進めていかなければいけないと思う。

○ **教育委員（長井知子君）** 三和小学校に伺った際、人数が少ないところに他の地域の子、他校からの子が来ると、学校の子供たちもすごく刺激になると。今まで同じグループ、同じ世界しか知らなかったからということを知った。今後兼山小学校は令和9年度新1年生が1人になってしまうことを考えると、小規模特認校としていろんな地域の子を受け入れることは、兼山小学校の子にとっていいことではないかを感じるため、そういったことも視野に入れて考えていかなければならない。

○ **教育長（堀部好彦君）** 三和小学校を訪問した際、改めて複式学級のデメリットを実感した。

県費及び市費の加配により、国語と算数と英語の学習についてはそれぞれの学年相当の学習が成立しているが、それ以外の教科においては例えば5年生・6年生の社会は、今年は6年生をやって、来年度は5年生をやるというようなことをせざるを得ない状況があると。

例えば、転出する子がおり、転校先の学校では当然ほかの子たちが学習している中身が、その子は未学習の部分があるため、詰め込み式で空いている時間に先生たちが指導して、その上で転校したと。これも一つのデメリットかと思われる。そのため、複式学級を回避するためのことを考えていかなければならないと保護者に言い続けていくことが大切だと考える。

○ **市長（富田成輝君）** 保護者がまだ実感できていないということもあるが、この問題の一番難しいところは、複式学級がいい悪いということを確認に示すことが困難ということである。メリットもあり、デメリットもある、またそのメリット・デメリットも受け取り方によってはデメリットになったりメリットになったりするため、非常に難しい。現実に複式学級で育った子供たちが、将来どうなったのか、何か問題が起きたのかという情報はない。

可児市は大規模校から小規模校まであり、ある意味日本の縮図のような、外国籍児童も多く、多様な問題を抱えている地域である。可児市の顧問である尾木直樹先生は、以前は大規模過ぎでも小規模過ぎでも駄目だという認識だったが、一方で大規模には大規模の思ってもみないよさがあり、小規模には小規模のよさが現実にはあるということで、ちょっと驚いたとおっしゃっていた。

そのため、保護者には複式学級で育つ子のメリット・デメリット、経営者側ではなく、子育てという視点における、子供にとってのメリット・デメリットをできるだけ情報を集めてお伝えし、一緒になって考えていくことを複式学級になってからも続けていかなければならない。

小規模校の子たちが大規模の中学校へ行ったとき、大人数と接する経験が少ない子はそれまで先生に手厚くしてもらったのが全くなくなるため、その落差は非常に大きい。何十人もいる同級生と今後うまく付き合っていけるかどうか、社会に出たときそれはより激しく、そういった環境で育った子たちが違う環境に入ったときにうまくやっていけるのかどうか。それは、私自身の経験から見ても非常に大きいと思う。

その子が将来違う環境に入ったときに、ちゃんとやっていけるかどうか本当は何か実証があるとよいのだが。実際にすごく少ないクラスからいきなり大規模の中学校へ行ったときに、すごく大変だったという経験者の声は聞いている。

私は今渡で蘇南中学校だったが、帷子から来る子はすごく少なくて、彼らはすごくプレッシャーを感じていたように思う。そういったことも含めて、兼山の子がしっかり社会人として成長していくのに必要以上のプレッシャーはかけたくないし、着実に成長して行ってほしい。

いずれにしても、そう時間的余裕はないが、ある意味議論は始まったばかりであるため、これから我々自身が努力して、いろんな情報を集めて兼山の保護者に伝えていかなければならない。

ただ、アンケート結果で多少気になるのは、4から6年生の保護者は、数は少ないが統合検討が他の学年に比べ多い。これはどういうことかと。

○ **教育委員（小栗照代君）** 高学年になってきたときに、いよいよ親としては自分事として、やはり大勢のところまで過ごさせてやったほうがいいと思われるのかと私は感じた。

○ **市長（富田成輝君）** 学校に4から6年生の子を持つ親の意見をちょっと聞いていただきたい。いよいよ中学校へ行く段階になって若干心配だということだとすると、それは子供もおそらく同じ感覚を持っていると思う。ある意味非常に手厚い環境で育った子が、これから違う環境へ出るときの不安は絶対あると思うため、そういった理由であるなら、参考になると思う。

手厚く育てられた子が、そうじゃないところへ行くときの環境の変化が最も心配である。子供たちにとってどうなのか、一度また教育委員会で、そういう実例や学者の意見、研究、メリット・デメリットの中にすでに入っているかもしれないが情報があったら教えてほしい。

確かに教育が手厚過ぎるといえるのは逆に心配であるため、その辺も併せてできるだけ今後とも情報をいろいろ調べ、保護者にお伝えする努力を当面は続けていくと。

子供たちをしっかりと教育するという責任は、親にもあるが我々にもあるため、保護者アンケートがこうだから、それでいいというわけには我々もいかない。親とは違う視点で、教育を提供する側として判断しなければならないこともある。子供に対して親の責任はもちろん、我々にも責任があるため色々な情報をこれからの的確に集めて分析して伝えていきたいと思う。

○ **教育委員（丹羽千明君）** 差し当たって、小規模特認校制度を兼山に取り入れるかどうかということも必要になってくるかと思うが、どうか。

○ **市長（富田成輝君）** 取り入れることは全然問題ないと私は思う。事務局には問題ないのではということも伝えてある。色々な選択肢はあっていいと思う。本当は市内

どこの学校へ行ってもいいよというのが理想だが、経営上それは不可能である。少なくとも兼山については、問題ないと私は思う。保護者の了解も得た上で実施していただければいいと思う。

- **教育委員（小栗照代君）** よそから来るのとか、どういう子が来るの、PTA役員はやってもらえるのといった御意見もあるようだが、きちんと保護者に御理解をいただいで進めていければいいかと思う。
- **市長（富田成輝君）** 当然、PTAの役員はやっていただかなければ困る。
- **教育長（堀部好彦君）** 兼山小学校は、きめ細かな指導ということが一つ小規模校の特色として言えることに加えて、市としても推奨しているふるさと教育が報道等されているとおり大変充実している。兼山のいいところ、特色、その教育活動が各学年で成立している小規模校であること、ふるさと教育推進といったこともうたいながら、学びたい人おいでよという、宣伝の仕方を考えなければならないということは地域の方々の感情を思うと慎重にと感じる。

- **市長（富田成輝君）** 2番目、可児市のICT教育について。
現状、今後の予定について説明の後、御意見をいただきたい。
- **学校教育課長（今井竜生君）** 可児市ICT教育の見通しとして、今年度の流れは、4・5月は全体を整えるという段階で、6月は子供たちもタブレットを使えるようになり、9月以降はだんだん子供主体で活用できるようにしていくという流れである。
夏休み明けまでにプロジェクターが配備され、9月からはプロジェクター等を使いながら教育が進めていけることになる。
タブレットについては、5・6月にルールの確認、誓約書等を配布・回収しており、子供たちともルール、約束を確認しながら使い方を教えているところである。
教職員については、4・5月、校内研修で扱い方を学んだり、授業で実際に使ってみて、その様子を交流したりしている。また夏休みに外部講師の研修の場を持ち先生方が実際使えること、授業での活用方法などを進めている。
家庭への持ち帰りについては、全体ではないが、例えばテストとして家庭へ持ち帰ったときに、どんなことができるか、できないことがあるかを中学生で確認している。
授業だけではなく、学年集会や生徒会活動でも教室と教室をつないで利用したり、職員研修として、実際研究所の職員が学校へ出向き、どんな使い方ができるか、工夫の仕方などを伝えながら学ぶなど、現状はこのように進んでいるところである。
- **市長（富田成輝君）** 今のところトラブルはないか。よく新聞で1つは、視力をはじめとする子供の体への影響。もう一つは、家でゲームに使ってしまっていると。できないような設定があるが、それをかいくぐれるものがネット上で流れていて、逆に家庭での勉強に悪影響を及ぼしているという主に2つについて、現状特に何か思ってもみない課題などはあるか。
- **学校教育課長（今井竜生君）** 健康面についても配慮が必要だが、今のところ特に聞いていない。また、家庭では自由に使える状態にはまだないため、そういったこともない。使用のルールにもその点記載しており、保護者にも理解いただいている。今後出てくるかもしれないため適正に対応していかなければならないと考える。

○ **市長（富田成輝君）** 子供の習熟度に大きな差が出てきつつあるなど、そういう問題もないか。

○ **学校教育課長（今井竜生君）** 今はどちらかというところ、子供たちが本当に楽しみながら新しいことをしており、いい方向で使えていると思う。

○ **教育委員（伊藤小百合君）** 小・中学校全生徒にタブレットを配付いただき感謝している。

学校訪問した際も、子供たちが楽しく使用する様子や、教え合う姿が見られ、本当に子供は順応が早いと思って見ていた。

先生も、得意不得意ある中で教え合い、学校によってはすごく使っていて進んでいるところと、まだ使い始めというところがあったため、徐々に同じレベルに近づいていくのではないかと思う。

○ **教育委員（小栗照代君）** 若手の先生がベテランの先生に使い方を教え、その上でベテランの先生が授業に生かす方法を教えるなどお互いにできるところを助け合って、活用いただいている。

職員会議などをオンラインで行っている学校もあり、先生方も試行錯誤しながら、上手に使う方法を考えて、授業に生かしていただいていると感じた。

○ **市長（富田成輝君）** できるだけ学校ごとに知恵を使い、またそれを共有してと。学校ごとの特色があってもいいし、逆に学校間で格差ができてはいけないため、今後も情報共有をしていってほしい。

○ **教育委員（丹羽千明君）** 毎時間タブレットを使うとなると、やはり目に影響があると思うため、決められた時間をとということで進められると思う。また、プロジェクターもかなり進化しており、見やすかった。

○ **教育委員（長井知子君）** 学校訪問の際に印象的だったのが、ある学校長によると、タブレットで子供たちにコミュニケーションを取らせることで相乗効果があったと。

また、不登校だとか、保健室登校している子供たちに対し、タブレットを用いて遠隔授業を試していると。そういった子供たちのための活用方法もあるなと思った。

○ **市長（富田成輝君）** 導入することによって、当初予定になかったいい面も出てくると思う。

○ **教育長（堀部好彦君）** 学校訪問する中で、色々な活用をされていると感じ非常にありがたい。今後格差が生じる可能性はゼロではないが、各校長が一致団結していると感じる。

4月最初の校長会で、小中校長会長が今年の校長会の方針の中にICT活用をぜひ入れたいと。これをみんなで一生懸命取り組もうとされたことも大きいと思う。いいICT教育のスタートができていないのではないかと実感している。

○ **市長（富田成輝君）** ほかを削って多額の予算を使って、議決いただき導入しているものである。ほかを削ってでも導入したことの成果が予定以上に上がるよう、ぜひ各学校努力して、情報共有していってほしい。教育委員会も、先進市、先進校の情報を教育委員や各学校に流すよう取り組んでほしい。質的にレベルの高い使い方をしていただきたいと思う。

蘇南中学校でコロナにより来られない子に対して生徒らが助けて、いろんな情報を渡

したというのはタブレットを使ったのか。

- **教育長（堀部好彦君）** 授業を生配信し、リアルタイムで授業が見られるようにしたと。英語のペア学習などでやり取りもしたと聞いている。
- **市長（富田成輝君）** コロナになって学校に来られない、しばらく休まなければならないというときなど、まさにこういう力を発揮できるとよい。

- **市長（富田成輝君）** 3つ目の議題、コロナ感染症禍における学校運営について。
- **学校教育課長（今井竜生君）** 令和3年4月以降の感染者数は、小学生20名、中学生11名。今年度始まってから陽性判明が多数あった。ただ、6月中旬からは報告数が大きく減少し、今のところ落ち着いた状況にある。

2番目、対応策については、昨年度の経験を生かしながら取組を継続し、それを習慣づけるというところを学校は一生懸命やっている。それも成果として上がってきているのではないかと思う。

市としては、6月からの部活動を原則中止としたが、中体連等に向けた取組があったため、感染症対策をきちんと取って取り組むこととしている。

それから、宿泊を伴う行事についても、6月20日までは中止または延期ということであったが、感染症対策を取った上で実施する。それを保護者へも説明していくという形で進めていく予定である。

7月になってからは、マスク着用と熱中症防止というのがとても難しい問題である。ただ、体育のときなど子供たちにも声かけし、マスクを外すように指導している。

また、家庭への協力依頼ということで、児童・生徒本人だけでなく、同居の家族が調子が悪い、濃厚接触になった場合にも登校しないという呼びかけをしていったことが、広がりを抑えていると考える。

今後の動きとしては、行事をできるだけ対策を取りながら進めていきたい。「笑顔の学校」公表会等も昨年度は中止したが、例年とは違う方法で進めていきたい。

- **市長（富田成輝君）** この件について御意見等をお願いしたい。
- **教育委員（伊藤小百合君）** 子供もコロナ禍に入ってからずっと検温や体調チェック、消毒などを当たり前に行っており、先生方にそういう習慣をつけていただいたと思うし、学校で感染が広がるということが今までないため本当にありがたい。
- **教育委員（小栗照代君）** 体育の授業で制限があり、思うように動けないなど見えないところで体力が落ちていたり、メンタル的にも我慢していたことが今後影響してくるのではないかと懸念する。教育委員会として何か対策を打つということをしていかなければならないと思う。
- **市長（富田成輝君）** 学校で先生方に状況を注視してもらい、何か問題が起きそうなら、早め早めに連絡をいただくということは大事である。
- **教育委員（長井知子君）** コロナ禍でもできること、コロナ禍だからこそやれること、何か子供たちにしてあげられることはないかを先生方は考えておられ、努力いただいている。
- **市長（富田成輝君）** 最初の頃は情報がないので、すべて中止せざるを得ないという状況だったが、現在は守るべきことを守って、やり方さえ工夫すればできることが

あると思う。教育以外の分野においても、今までやってきたことの形を変えていかないといかないし、子供たちを預かる我々としては、やれることはいろいろ考えてやってあげたい。

県内でも学校で広がった例は何か所かあるが、可児市は家庭内での感染で、学校で広がったというのはほぼないため、本当にありがたい。対策すれば一定は防げるとはっきりしてきているため、そういう知見を生かして、子供たちが授業以外でいろいろ学習できる場をつくってあげたいと思う。

- **教育委員（丹羽千明君）** ワクチン接種が今後は12歳以上の児童・生徒にも進んでいくが学校ではなく病院で任意で打つということで、接種状況によりいじめにつながってはいけない。
- **市長（富田成輝君）** その通りである。現段階では、当初から学校で集団接種を行う予定はない。その他なにか。

〔挙手する者なし〕

- **市長（富田成輝君）** では、特に議題1の兼山小学校については、今後の課題であるため、引き続きしっかりと議論していきたいと思う。

閉会宣言

- **市長（富田成輝君）** 令和3年度第1回の総合教育会議の閉会を宣言。

閉会 午後3時07分